

部門活動報告

9月9日 宇都宮大学訪問「基盤教育センター」 報告

Visiting Information Technology Service Center of Utsunomiya University

横浜国立大学大学教育総合センター

英語教育部

高橋邦年, 渡辺雅仁, 田島祐規子, 満尾貞行

英語教育部では、9月9日に、部門長・高橋以下、渡辺、田島、満尾の4名で、宇都宮大学の英語教育組織「基盤教育センター」を訪問し、同センター所属の金子准教授より同大学における、学生の自律学習を促進する組織体制について説明を受けました。その内容について、以下の通り報告いたします。

1. まとめ

現在、外国語教育では「教え中心」から「学び中心」へパラダイム・シフトしつつある。言い換えれば、新たなパラダイムでは、教師が講義形式に教えることを授業の中心に据えるのではなく、学習者が四技能を駆使してコミュニケーションなタスク活動に取り組めることを目的とする。つまり、その目的をもって教師は十分な授業計画と準備を行い、授業中は *facilitator* (学習の手助け) の役割を果たすことになる。したがって成績評価については、結果的にテストなどによる実力向上の結果を測るプロダクトのみではなく、学習のプロセスをも評価の対象にする。

現在、この一連の流れとして、特に大学教育レベルでの英語教育では、英語コミュニケーション能力向上の方法、学習者要因の解明とともに、学習者オートノミー (自律性) の育成を図る研究と実践が盛んになってきている。多くの大学で取り入れ始めている SALC (Self-Access Learning Center) は、こういった教育目的を踏まえた指導・支援システムの一部として大きな役割を担う学内機関として期待されている。今回、視察の機会を得た宇都宮大学の English Program of Utsunomiya University (EPUU) は以上のような教育目的のもとに創られた英語教育プログラムである。同大学では、この英語教育プログラムを推進するうえで、さまざまな運営方法を構築しているが、「基礎教育基盤センター」所轄の語学ラボラトリーはとりわけ重要な役割を担っている。SALC が有効に機能するには、以下の①～⑦の条件が必要である (Benson, 2011)¹。その条件に照らし合わせながら、EPUU とその設備である様々な語学ラボ等 (リーディングラボ、DVD ラボ、シアター、CALL ラボ、英語クリニック) について、報告をする。

宇都宮大学語学ラボは、自律学習につながるセルフ・アクセス学習を目指したプログラムと考えられる。学生は、授業中心に、その延長の学習に関連施設であるリーディングラボ、DVD ラボ、シアター、CALL ラボ、英語クリニックを利用することを期待されている。このような各種施設を授業に関連させることはとても重要であり、指導が効果的であれば、それが自主学習に繋がり、やがて自分で目標を設

¹ 他の参考文献は割愛した。

9月9日 宇都宮大学訪問「基盤教育センター」 報告 英語教育部

定し教材を選択し自己評価もする自律学習に昇華する可能性がある。今回の訪問において、宇都宮大学では上記の教育基盤をもとに、学生を自律学習に向かわせるべく、個々の教員が授業内で指導を行っているという印象を強く持った。

SALC の運営方針については、(ア) 自律を促すという理念、(イ) 学習者の個別化学習の機会の提供という実践という二本柱の設定が必要条件だと言われる(Sheerin, 1997)。EPUU については、この方針設定の観点からみても、特に様々な学習者（英語習熟度、興味度など）への対応を考慮したプログラムであるということがよくわかった。

また、機能的な SALC の 7 つの条件から観た運営上の EPUU については、以下の通りである。

- ① **学習リソース**：DVD ラボがあり、DVD、VHS といった聞く学習（英語キャンプションがあればそれを読む活動が入る）を自主的にすることも、授業の課題としての取り組みでもできる。多読のためのリーディング・ラボもあり、graded readers²をはじめ、DVD や VHS の映画のもとになっている原書等もある。
- ② **個別学習エリア**：DVD、VHS を図書館で利用する、映画シアターを予約して利用するという意味では存在する。
- ③ **グループワーク、学習共同体を形成する場**：英語クリニックと呼ばれる部屋があり、Native Speakers との少数グループによる英語会話ラウンジとしての機能を果たしている。運営ならびに組織は教員による。
- ④ **学習支援デスク**：英語のカスタマイズを目的としたアドバイジング・サービスは、英語クリニックの部屋で可能である。
- ⑤ **特定のスキルを上達させる専門家のサポート**：2 年～4 年次に選択科目として用意されている「アドバンスト・イングリッシュ」プログラムが用意されており、学生は通常の履修科目として教室で受講ができる。学生が個々に自主的に勉強をする一方で、その学習プロセスにおいて彼らの自律学習をサポートする体制の用意は、宇都宮大学のみならず本学も含めた各大学の課題と言える。
- ⑥ **学習方法などについてのワークショップ、催しプログラムの提供**：特に現段階ではない。
- ⑦ **目標言語を使えるような機会（なるべく自然な環境で）**：「②」の設定を除いてとくにない。

以上の点に加え、物理的なスペースの確保に関しては、「百聞は一見にしかり」であった。1 つの建物に全英語教育施設が計画的に機能的に設置されている。また、英語授業担当者の教育という面でも週 1 回のミーティングが設定され、同大学の英語教育プログラム推進が有効に機能している印象を受けた。さらには、英語カリキュラムとの整合性があることも評価できる。

新しく設置されたばかりの語学ラボには、無論、今後の課題が何点かあると思われる。それは、このプログラムの評価・分析であり、また授業担当者による自律学習を促すための様々な検討（例えば、学習者への有効なアドバイジング方法をスタッフが学ぶなど）である。当センターは設置されたばかりであり、この課題はどの大学でも抱える問題ではあるが、特に次の四点が今後の課題と考えられる。第一

² グレイデッド・リーダーズは、使用する主要な単語を制限し、全体の量や文法事項を調整し、英語学習者が辞書無しで読書を楽しめるように工夫された多読用の英語教材。

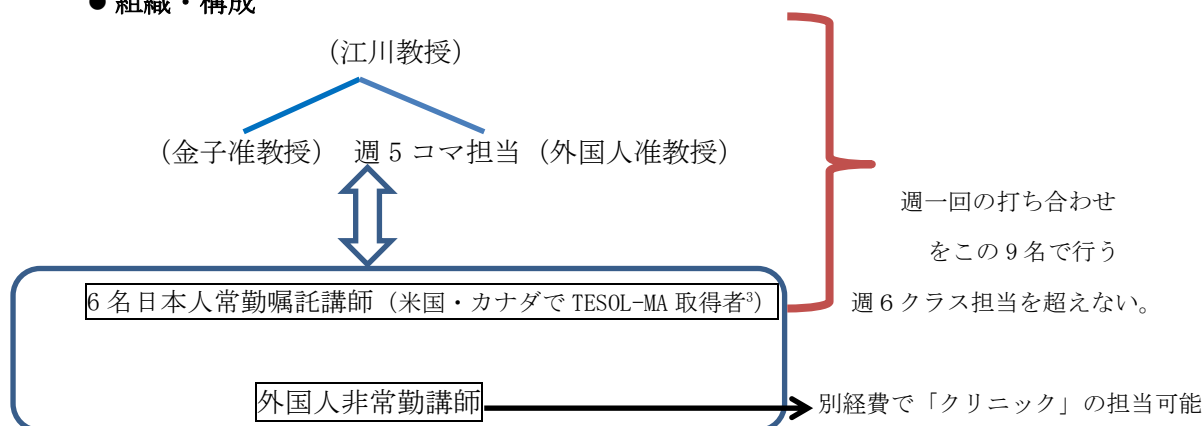
9月9日 宇都宮大学訪問「基盤教育センター」 報告 英語教育部

に、学習者ディベロップメント（例えば、自分の学習のニーズの分析⇒目標を立てる⇒学習計画を立てる⇒教材や学習活動の選択⇒学習の自己評価など）を学生に教示する機会のプログラム化と授業との関連づけ。（Nunan, 1997; Tomlinson, 2000）。第二に、学習助言を目的とするアドバイジング・サービスの組織的運営。第三に、英語母語話者教員によるクリニック教室における英語会話は別として、教員と学生による協働、相互依存、インタラクションの機会を組織的に運営すること。第四に、学生の運営への関与である。リーディング・ラボの受付は英語が得意な学生も手伝っているようであるが、同様な機会がさらに増えることを今後の発展に期待したい。なお、上記四点以外にも、セルフ・アクセス学習の評価は、「センターの評価」と「学習成果の評価」の二点があるが、これも今後の課題といえよう。

宇都宮大学で対応してくださった金子准教授は2011年4月に赴任したばかりであり、センター内組織・具体的な運営内容に関して得られた情報は、以下の三点が中心となった。EPUUの関連施設は、横浜国大にとっても参考になるものである。しかし、国大において具体化していくためには場所、スタッフ等、多くの課題を解決していく必要がある。学生の英語学習への興味度、習熟度という点では、国大は一步前を行っているのは確実である。そういった意味では、宇都宮大学と全く同じである必要はない。本学の学生のニーズをよく分析することも大いに参考になるものと考ええる。

2. 宇都宮大学の英語教育組織

● 組織・構成



- 嘱託講師は3年契約。給与は専任教員とは別の給与システムが適用されており高いとはいえない。

● 専任教員の担当率

30クラス×3科目=90クラス

専任3名×5 = 15コマ

嘱託6名×10 = 60コマ

合計: 75コマ

すべての英語実施コマ数に占める専任および嘱託教員の割合は約80%。参考までに比較するならば、

横浜国大: 315コマ中、専任103コマ 33% 英語教育部の専任教員で算出すると、43コマ 14%

³ TESOL-MA (英語教授法修士学位)

9月9日 宇都宮大学訪問「基盤教育センター」 報告 英語教育部

- 1学年約1000人を平均33名のクラスユニットにして1年生の授業を行う。1年生全員が、週3回の英語の授業を受講する。日本人教師・外国人教師を問わずそのすべてがほぼ英語で行われている。また、同じ名前の授業であるならばほぼ統一された教科書を使っている。授業内容については、以下の特徴を含む。

- ① ネイティブ教員の英語を聞いて授業を受ける機会が多い
- ② TESOLの資格をもつ日本人教員による映画英語の授業（CALL教室を利用して実施。聞き取りやシャドーイングの練習）がある。
- ③ TESOLの資格をもつ日本人教員によるリーディング授業（多読教材も利用しているが、その利用方法については教員の裁量による）が行われる。

横浜国大：週2コマの英語。学生100名について、1LRは2クラス（50名を超えないことを目標）、1Wは3クラス（35名を超えないことを目標）、1Sは4クラス（25名を超えないことを目標）、を原則にクラス編成を行う。語学教育にもかかわらず、実際には目標人数を上回ることも多々ある。

- クラス分けは入学オリエンテーション時にTOEICテストを行い、それによって習熟度クラスを編成する。

横浜国大：センター入試の得点でクラス分けを行うため、センター入試未受験の学生は、英語教育部教員の主観的な判断でクラス分けを行う。CASEC（オンラインプレイスメントテスト）を導入したが、学部の協力が十分ではないため、受験者数が少ない。

- クラス分けは単純にTOEICスコアで処理するので、教員の手を煩わせない。教員は、クラスのボーダーにかかる学生が出たときにだけ、その調整と処理にあたる。授業を実際に始まってからも、クラスの調整を行う。
- 1年次終了時にTOEICのテストを効果測定的に実施し、その得点に基づいて、2年次の選択クラスを決定する。高い得点を取らないと希望するクラスが選択できない。
- 年2回実施のTOEICの経費については、授業料の一部として、徴収している。
- 建物全体が「基礎教育基盤センター」になっており、英語授業や各種英語に関連する指導がそこで行われる。学生は、各学部の校舎からセンターに赴いて授業を受ける。（その意味で、学生には「英語教育の建物」として学内で容易に認識できて、それが良い意味において大学全体の英語教育活動に連動しているという印象を持つ。）



● リーディングラボ

- 1) パンフレットの写真の通りの素晴らしい施設。
- 2) 貸し出しは室内入口にあるカウンターで学生証を提示して貸し出し登録を行う。許可なく持ち出しができないように入出口にチェックできる機械が設置されており、返却が遅れた場合にはそれに対する罰則ルールを設けるなどの「貸し出し」についての管理が行われている。
- 3) カウンターの担当者が英語でやり取りできるようにするなど、入室と同時に「英語に触れる環境」の設定工夫がされている。(ただし実際には常に英語でやり取りするとは限らないという説明有)



- 4) 速読, 多読をどの程度行ったかについては, 学生が個々にノートにまとめている。貸出とともに, 単語数が記録されるような, システムにはなっていない。速読, 多読をどのように評価と連携するかについても教員個人の裁量に現在のところまかされている。

● DVD ラボ (図書室内に設置されている)

- 1) 学生の自主的な学習に活用。DVD は館外貸し出ししていない。
- 2) 同タイトルの DVD を複数購入し、授業で使用する課題に活用している。
- 3) 置かれている DVD は通常日本国内で市販されているもの。
(語学用教材として開発されている類のものはほとんど見当たらなかった。)
- 4) DVD の再生は, PC から行っている。Windows のメディアプレーヤーを利用することで, 区間再生など細かな再生が可能になる。ただし, この PC はインターネットに接続されていない。



● シアター

5名以上の利用者がある場合に、利用でき、主として授業外で学生が利用している。簡単な引き出し式のテーブルが利用できる。Blu Ray, DVD等の再生ができる。



● CALL ラボ

基礎教育基盤センター（建物）内に3室：48人×2室，30人×1室

TOEIC教材を使用

内田洋行のシステム（PC@LL）を利用。

映画DVDを利用した自主教材。聞き取りやシャドーイングの練習。いわゆる「お持ち帰り機能」によって、教材の一部をUSBメモリ等に記録して持ち帰る。教員が作成した教材は、インターネット経由で外部からアクセスできない。授業支援システムは利用されていない。

● 英語クリニック

希望者および成績優秀者を対象に、非常勤講師による学習相談および英会話ラウンジ。成績優良者については、非常勤講師と相談の上、学習内容を決定できる（学習のカスタマイズ）。



主な参考文献

Benson, P. (2011) Teaching and researching autonomy in language teaching. London: Longman.

Nunan, D. (1997) Strategy training in the language classroom—An empirical investigation. RELC Journal, 28, 56-81.

Sheerin, S. (1997) An exploration of the relationship between self-access in independent learning. In P. Benson & P. Voller (Eds.) Autonomy and independence in language learning (pp. 54-65).

9月9日 宇都宮大学訪問「基盤教育センター」 報告 英語教育部

London: Longman.

Tomlinson, B. (2000) Talking to yourself—the role of the inner voice in language learning. *Applied Language Learning*, 11, 123-54.